

古代、九州王朝にとって最大の敵、出雲王朝の持っていた神宝、それが銅鐸です。そういう意味で、銅鐸の消滅は、九州王朝にとって大変な意味を持っています。王朝の交替史を、出雲王朝、九州王朝、近畿王朝という変遷の中で考えますと、銅鐸の消滅した3世紀が、いわゆる出雲王朝に替わり、九州王朝が列島の盟主になったとの観点から銅鐸を考えていきます。

銅鐸について記紀は何も書いていません。なぜ書かないのかということもまた大きな意味があると思います。これは当然隠したという事になると思います。

九州王朝にとって最大の敵の持っていた神宝が銅鐸であったという事は、九州王朝の傍流（分派）から出てくる皇統にとって、いわゆる皇室にとっては、どういう働きをしていたかということ、それを潰しに行ったその役をしていたのが皇統だと考えられるからです。

皇室というのは、皇統一元史観で、我々は遠い昔より列島を支配していた。それも畿内でやっていたということになっていった。

それが銅鐸が別のところで出てきたという事は困った話になってくる訳です。それで一切書かない、説明しないことになったと考えられるのです。しかも銅鐸の神を消した訳です。そのため長い間1300年銅鐸について回答を得ることができなかったのです。

南船北馬説（室伏 志畔氏）というのがあります。交通手段に、長江下流の人が船を使い、北方騎馬民族は馬を使った。その違いで、南船系の倭人と北馬系の倭人を考えますと、日本というのは紀元前の5世紀から4世紀頃に長江下流にあった、呉や越の亡国の民が、呉越同舟して黒潮分流に乗って、韓半島や日本列島にやってきました。この人達が王権を作っていたと考えられます。古代王権は日本海側を流れたと言えます。

古田武彦氏はどこに王朝の起源を見たかという点で呉や越の王権ではなく、あとから天孫降臨で、侵攻してきた朝鮮半島経由の北馬系の倭人の王朝を九州王朝としました。その前には、南船系の倭人の王権があったということになります。日本の古代史は、東アジアの民族移動史の1コマであって、その基本矛盾というのは南船系の倭人と北馬系の倭人の抗争・興亡にある訳です。その基本的観点から銅鐸の問題も考えていきたいと思っています。

さて、以前は銅鐸文化圏と銅剣・銅矛文化圏という説が有りましたが、1984年と1996年に出雲の神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡が見つかりました。神庭荒神谷遺跡では、今までの出土数を上回る、358本の銅剣が見つかりました。しかし銅剣と言われていますがあれは銅矛と考えられます。加茂岩倉遺跡では、39個の銅鐸が見つかりました。

このことは、明らかに、出雲王朝があったとなる訳ですが、通説は、皇統一元史観ですのでまだ正式には認められてはいません。



■銅剣358本

荒神谷で発見されたとき、全国の銅剣出土総数は300本余りでしたが、荒神谷では4列に並んだ同じ形の銅剣358本が一度に出土しました。この発見はわが国の弥生時代の青銅器研究の見直しを迫る大きな出来事となりました。

■銅鐸6個と銅矛16本

銅剣358本のすぐ近くに埋められていた銅鐸6個と銅矛16本の組み合わせは、これまでに例のないものでした。銅鐸は国内最古型式のものが含まれ、銅矛には北部九州で出土する銅矛にみられる稜形状の文様があるなど、荒神谷青銅器の発見は、弥生時代についての興味と関心を大いに深めるきっかけとなりました。



銅鐸について言えば、39個の銅鐸が見つかったという事は、近畿圏の前に出雲に銅鐸王国があったと考えられます。これは何を意味するのでしょうか。

ヤマタノオロチ退治で成敗されたヤマタノオロチ族（八雲族）の神宝だったと考えられます。さらに言えば、「八雲やくも立つ 出雲いづも八重垣やへがき 妻籠つまごみに八重垣作る その八重垣を」は、嘆きの歌ではないか。

妻籠つまごみとは「手籠てごめ」ではないか。スサノオ軍の侵攻の際人民への凄惨な行為を象徴しているのではないか。ちょうど大祓の祝詞（注）にある、国津罪の「母と子を犯せる罪」と同じではないのか。八重垣とは掟・法律の事で、法律が有るにもかかわらずこのような事が行われた事と考えられます。（注：六月晦大祓祝詞 ミナズキのツゴモリのオオハラへのノリトを参照願います。 検索「日本古代史の謎 asahinet」）

ところが記紀文化というのは、そういう凄惨・恐ろしい事柄等を相聞歌（恋の歌）の方にずらして記述しています。だから日本人は昔から平和であって、そんな凄惨な・恐ろしい事など無いと思わせられてしまった。実際は、おぞましい光景は、記紀や大祓の祝詞に書かれているように侵略戦争の中では繰り返されたと考えられます。



銅鐸について言えば、出雲が侵略を受けたので、その銅鐸勢力が逃げていったのが、近畿地方であると考えられます。図の銅鐸文化圏というのは、出雲の銅鐸文化圏が敗れたあとの勢力図だったと考えられます。

侵略者は、どういう人達かということそれは銅剣・銅矛を持った人達という事になります。しかし神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡で発見されたものは、銅剣・銅矛と言われているかもしれませんがあれはどちらも銅矛と考えられます。なぜならば、古来から出雲の神（大国主）は、八千矛神（やちほこのかみ）と言われているからです。やはり矛と考えたほうが良いのではないのでしょうか。

出雲王朝があって侵略されて、人々は畿内に、東へ逃げた。敵は西からやってきたという事になります。神庭荒神谷の358本の銅剣の発見というのはどういう事かといいますと大国主の国譲りを示しているのではないのでしょうか。出雲が侵略を受けたので、その銅鐸勢力が逃げていったのが近畿地方で、図の銅鐸文化圏というのは後々の状況を示していると考えられます。しかし国譲りが終われば、畿内勢力も侵略の対象となって、最終的には、畿内の銅鐸文化圏も3世紀頃には、滅ぼされてしまった。

3世紀というのは、九州王朝支配の確立で、国譲りとは、出雲王朝から九州王朝への国譲りの事であって、決して大和朝廷への国譲りではありません。それを大和朝廷への国譲りのように見せているのが、記紀だといわれています。

大国主はなぜ大穴牟遲神（おおあなむち）と呼ばれているのでしょうか。

八雲王朝はどこにあったのでしょうか。

加茂岩倉遺跡の場所は、大原郡です。当時の地図や『出雲国風土記』によると9つに分かれています。（意宇・島根・秋鹿・楯縫・出雲・神門・飯石・仁多・大原の各郡）。大原郡、ここが出雲の別名大国（州）といわれている所です。

出雲王朝は、出雲郡のスサノオから始まり、他の8郡を従えたのでヤマタノオロチ退治の話にしたと考えられます。たぶん越の国の八族ではないかと思われれます。それは冒頭で述べましたように、呉や越の亡国の民が、呉越同舟して黒潮分流に乗って列島にやってきた人達ではないかと考えられます。丹後半島には、船がそのまま入れる船宿（写真：伊根町）があります。あれは越の地方の風習だといわれています。



須佐之男命の娘である須勢理毘売命（すせりびめのみこと）に婿に入ったのが、大国主（大穴牟遲神おおあなむち）ですが、実はスサノオを手引きしたのではないのか。これは2つの勢力（征服・被征服）で、妥協が成立し始めているのではないのか。畿内での銅鐸文化の復活を象徴しているのではないのか。出雲系の復活ではないのか。

最初にヤマタノオロチ退治で侵略されたのは、八雲系の多氏だと考えられますが、その後国譲りによって出雲系の多氏が逃れていったのは畿内の三輪山の麓です。唐古・鍵遺跡（からこ・かぎいせき）は、八雲系の多氏と出雲系の多氏によって開かれ、後にニギハヤヒ系の物部氏も関わって、巻向遺跡に発展する形になってくる訳です。だからあれは天皇家によって作られた遺跡では無い事になります。

解説：唐古・鍵遺跡（からこ・かぎいせき）は、奈良盆地中央部、標高約48メートル前後の沖積地、奈良県磯城郡（しきぐん）田原本町大字唐古及び大字鍵に立地する弥生時代の環濠集落遺跡。出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

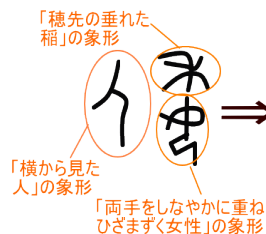
解説：纏向遺跡（まきむくいせき、纏向遺跡）は、奈良県桜井市の三輪山の北西麓一帯にある、弥生時代末期から古墳時代前期にかけての集落遺跡。国の史跡に指定されている。3世紀に始まる遺跡で、一帯は前方後円墳発祥の地とする研究者もいる。邪馬台国の中心地に比定する説があり、箸墓古墳などの6つの古墳が分布する。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

そしてこれらを滅ぼしたのは、九州の勢力であった。九州勢力も最初の王というのは金印国家（漢委奴国王印）の委奴国です。通説では、まだ漢委奴国王印（かんのわのなのこくおういん）と呼んで倭国の属国の奴国としていますが、あれは委奴国（いぬこく）が貰ったとの解釈が正しいと考えられます。

イヌというのは、現在「あいつはイヌにも劣る」といわれる様に侮蔑語にも使われていますが、これは最初に王国を作ったイヌ系の王族を卑しめる言葉と考えられます。なぜイヌが大事にされるかといいますと、中国の長江地方に、イヌを祖先と考える種族（シェ

族)等がおります。彼らの伝承によればイヌが尻尾に稲穂をつけて帰ってきたことで稲作がはじまったとしています。それで彼らは豊かになっていったと伝承されています。このような問題が隠れている訳です。金印の委奴国(いぬこく)、魏志倭人伝にも中に出てくる狗(いぬ)という漢字が使われている国が半島側(狗邪韓国)にも、九州側(狗奴国)にもあります。このイヌ系とは、南船系倭人の国の事を意味し、北九州から韓半島の南側にわたって倭国があったと示唆しているようです。



また倭国の倭という文字は、漢字学者によると稲が実って穂を垂れている姿で、実りの姿を表していると言われています。いわゆる倭国、倭人というのは、稲作国、稲作民を表しているのではないのでしょうか。決して卑語ではないと思われます。

最終的には、畿内の銅鐸文化圏も3世紀頃には、滅ぼされてしまった。3世紀というのは、九州王朝支配の確立で、国譲りとは、出雲王朝から九州王朝への国譲りの事であって、決して大和朝廷への国譲りではない。と述べました。

それでは、九州王朝は、いつできたのでしょうか。

これは二中歴(年代歴)に書かれています。

この中には継体から大化までの31の年号が書かれています。

その最初の説明に、年始五百六十九年でそのうち無年号が39年あって、継体(517年)が始まったと書いてあります。

「 二中歴 年代暦 (付西暦年数)

年始五百六十九年内廿九年無号不記支干其間結繩刻木以成政

継体 五 元丁酉 五一七～五二一 (～略～) 大化 六 乙未 六九五～七〇〇」

・ ・ 以上部分掲載 ・ ・ 詳細は「隋唐へ「記紀」の付度(郡評論争と大化の改新)を参照のこと。 検索「日本古代史の謎 asahinet」

上記を見ると、始まって569年と書いてあります。継体が517年ですから、569年遡ると、517-569=▲52年(紀元前)なります。

つまり紀元前52年が九州王朝が生まれたと考えることができます。

まだこの時期に列島を支配できていなくとも、倭国としての金印国家(漢委奴国王印)の委奴国が、生まれてきたと考えられます。

その頃は出雲王朝の時代に当たります。出雲王朝はいつ頃なのでしょう。

銅鐸というのは紀元前2世紀～紀元後2世紀末頃までの約400年間が銅鐸時代です。

これが出雲が中心の時代であったと考えられます。

決して九州王朝から出雲王朝が生まれたということではありません。

その銅鐸を記紀は一切書かいていません。なんで書かないのか。

銅鐸というのは列島王権の最初の神宝としてあるので、これが出雲であるとなったら、皇統一元史観が崩れる事になります。だから一切触れないのです。

本当は、九州王朝が隠すのだったらわかりますがどうして、皇統が隠すのかということは、九州王朝の分流（傍流）として近畿王朝ができてきた事、また銅鐸王朝への侵略に加担してきた一族があってそれが皇統を作ってきた経緯があるからだと考えられます。

まさに自分たちが加担して滅ぼした王朝の神宝故に、出雲、九州、近畿に広がっていたが故に、皇統一元史観が崩れる事になってしまうからです。

自分たちの神宝ではないので、近畿王朝以前に出雲王朝、九州王朝が存在したことがわかってしまう。だから一切触れない・触れなかったと考えられるのです。

ところが面白いことに、最初の銅鐸の記事が扶桑略記にあります。

僧・皇円が編纂したとされています。この人は藤原家の出で、豊前守藤原重兼の子として生まれました。法然の師であります。

「天智天皇7年（668）正月17日、近江国（滋賀県）志賀郡で崇福寺という寺を建てるために地ならしの工事が進められていた時、高さ五尺五寸もある銅鐸が一個掘り出された」と書かれています。

まさに銅鐸のことを最初に語るのは藤原氏であった。日本書紀も藤原不比等が関わったと言われています。また事件が起こったら最初の発見者を疑えということばがありますが、銅鐸の問題で最初の語るのは藤原氏であったということになります。

藤原氏は銅鐸のことを知っていても、記紀に書かなかったのではないかと思います。

解説：『扶桑略記』（ふそうりゃくき）は、平安時代の私撰歴史書。総合的な日本仏教文化史であるとともに六国史の抄本的役割を担って後世の識者に重宝された。寛治8年（1094年）以降の堀河天皇代に比叡山功德院の僧・皇円が編纂したとされる。

解説：僧・皇円： 生年は不明だが、嘉応元年6月13日（1169年7月9日）に、96歳で没したとされるので、承保5年（1074年）の生れか。関白藤原道兼の玄孫（孫の孫）で、豊前守藤原重兼の子として肥後国玉名荘（現熊本県玉名市築地（ついじ））に生まれた。兄は少納言藤原資隆、母親は玉名の豪族大野氏の娘とも推測されるが不明。幼くして比叡山に登り相生（すぎう）流の皇覚のもとで出家得度し顕教を修め、さらに密教を成円に学んだとされ。二人の名前からそれぞれ一字を取り皇円と称したとされる。比叡山の功德院に住み、その広い学徳により肥後阿闍梨（あじゃり）と尊称された。浄土宗の開祖である法然は、皇円の下で学んだが、その後離れる。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

現在銅鐸は、500個以上出ています。隠しようもなくなっています。

銅鐸発見史の中で注意したいのは、大場磐雄（おおばいわお）さんが、銅鐸が出てくる土地は「みわ、かも」という地名に関係すると書いておりました。それがあの加茂岩倉遺跡から出てきました。「かも」というのは、河姆渡遺跡（かぼといせき）の「かぼと」から音の変化したものである。「やめ」も「やべ」に変化したと言われています

詳細は、「隋・唐による全土の統一と日本語への影響」：「永井正範氏の古代日本語における m 音と b 音の交代現象について」を参照のこと。 検索「日本古代史の謎 asahinet」

さらに柿本人麻呂が殺されたのは「かも」という地名の所とされています。 古代の役人というのは、自分の任務のときは公道を通らなければならないことになっていまして、公道で出雲の方へ行く道で「かも」という地名が有るのは、加茂岩倉遺跡だけです。この周辺が終焉の地だったのかもしれませんが。

解説：河姆渡遺跡（かぼといせき）：余姚市の河姆渡鎮の河姆渡遺跡から発見されたことから、河姆渡文化とよばれる。河姆渡遺跡は1973年に発見され、1973年から74年と1977年から78年の2回にわたり発掘作業が行われた。水稻のモミが大量に発見されたため、約7000年前に人工的かつ大規模に稲の栽培が行われていたことが明らかになった。
出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：大場 磐雄（おおば いわお、1899年9月3日 - 1975年6月7日）は、日本の考古学者。國學院大學教授。文学博士。旧姓は谷川だが、昭和3年（1928年）、母方の大場家を相続し、以後、大場姓となる。楽石と号す。
出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』



銅鐸史の中で、興味が有るのは「聴く銅鐸」から「見る銅鐸」に変わったと言われていることです。小型→中型→大型に変わっていったと言われている。しかし小型は別でこれは、銅鐸から切り離して考えることで整理・区分すると小銅鐸は、鉄鐸や鈴のように矛の先などにつけて鳴らす用途ではないのか。それで中型銅鐸、大型銅鐸がホントの銅鐸ではないのか。出雲で出た銅鐸は、いずれも中型と大型で、小型はありません。確定ではありませんが、切り離しても良いのではないかと思います。



銅鐸にかかっている流水文や袈裟襷文など水に関係するものが多く、やはり水稻稲作に関係のあるトンボ、蛙、魚、亀、鹿、鷺など田んぼ周辺にいるものばかりで猛獣は描かれておりません。

やはりこれは稲作民族に関係する物だと考えた方が良いでしょう。呉越の民の南船系倭人というのは、集団稲作を持ってきたと言えます。紀元前の5世紀から4世紀頃に長江下流にあった、呉や越の亡国の民が、呉越同舟して黒潮分流に乗って、韓半島や日本列島にやってきました。この人達が王権を作ったと考えられます。

稲だけをとりえれば、陸稲・水稻も有るし6000年前の稲（陸稲：インディカ種：「長粒米」）も発見されていますが、列島に広まったのは、やはり呉や越の民が集団稲作を持ってきた事からと考えられます。これが九州からはじまっています。

銅鐸研究で欠けているものはなにか。

大英博物館やルーブル博物館には、古代エジプトの遺跡から持ってきたものが有ります。古代メソポタミアの色々な出土物があります。あれを見て、昔のイギリスやフランスではこんなものがあったんだという人はいません。

ところが日本では、皇統一元史観なので古いものは天皇家が持ってたみたいになっているのです。やはり他人の物を持ってきました。出雲王朝や九州王朝の物も中に取り込んでいるという事です。

例えば、あの正倉院の御物ですが、正倉院創建は、奈良時代（710年から）、日本国は（701年から）開始です。それ以前は、九州王朝（倭国）となるわけです。この倭国の御物をごっそりと持ってきたと言われています。古い時代の半分以上は倭国の御物と考えられています。倭国の正倉院は福岡県小郡市付近にあったのではないかとされています。

解説：正倉院（しょうそういん）：規模は正面約33.1メートル、奥行約9.3メートル、床下の柱の高さ約2.5メートルである。 建立時期は不明だが、光明皇后が夫聖武天皇の遺愛の品を大仏に奉獻した756年（天平勝宝8歳）前後とみるのが通説である。759年（天平宝字3年）以降、宝物出納の記録が残っていることから、この年までに建立されていたことがわかる。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

	書名	作者	巻数
1	史記	前漢・司馬遷	130
2	漢書	後漢・班固	100
3	後漢書	南朝宋・范曄	120
4	三国志	晋・陳寿	65
5	晋書	唐・房玄齡他	130
6	宋書	南朝齊・沈約	100
7	南齊書	南朝梁・蕭子顯	59
8	梁書	唐・姚思廉	56
9	陳書	唐・姚思廉	36
10	魏書	北齊・魏収	114
11	北齊書	唐・李百薬	50
12	周書	唐・令狐德棻他	50
13	隋書	唐・魏徵、長孫無忌	85
14	南史	唐・李延寿	80
15	北史	唐・李延寿	100
16	旧唐書	後晋・劉昫他	200
17	新唐書	北宋・欧陽脩、宋祁	225
18	旧五代史	北宋・薛居正他	150
19	新五代史	北宋・欧陽脩	74
20	宋史	元・トクト（脱脱）他	496
21	遼史	元・トクト（脱脱）他	116
22	金史	元・トクト（脱脱）他	135
23	元史	明・宋濂他	210
24	明史	清・張廷玉等	332

スサノオは、どこから来たのか。九州王朝タカミムスビの神系列であるとする、これは「2つの勢力（征服・被征服）で、オオクニヌシ系と妥協が成立し始めているのではないのか。畿内での銅鐸文化の復活を象徴しているのではないか」と述べました。これは九州王朝系の意向を無視しているということになって、最終的にはタケミカヅチをおくって国譲りをさせた。

記紀との関係を考えて、記紀は八雲王朝や倭奴国（いぬこく）は、漢委奴国王印（かんのわのなのこくおういん）と呼んで言わせない。何故か 記紀というのは、北朝系の史書であって、南朝系の王朝は偽朝として認めない、書かないという立場をとっています。これは中国の正史、24史の形式です。

解説：二十四史（にじゅうし）とは、中国の王朝の正史24書のことである。伝説上の帝王「黄帝」から明滅亡の1644年までの歴史を含む。（左図参照）

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

黄河文明の洗礼を受けた北朝文明と言えます。南朝は偽朝として書かないという体裁をとっています。記紀の前に、スサノオの前にヤマタノオロチの八雲王朝があり、天孫降臨の前に金印国家の委奴国（いぬこく）があった。ということは書かない北馬系の史書です。

また銅鐸が埋められていた加茂岩倉遺跡は大原郡です。多氏の中心です。ここに神原神社が有ります。銅鐸王朝の神の中心地があったのかもしれませんが。また意宇郡には、熊野坐神社（熊野大社）が有ります。どちらも元は、オオクニヌシを祀っていたもので、どちらも鎮魂社と考えられます。神原神社→熊野大社→出雲大社という変遷が考えられます。

更に熊野大社の近くに、意宇六社の一社である神魂神社（かもすじんじゃ）がありますが、現在は伊弉冊大神（イザナミ）を主祭神とし、伊弉諾大神（イザナギ）を配祀としています。神魂神社に神魂命が祀られていない状況です。これも元は、出雲国風土記では神魂命と書かれていますので、記紀で云うカミムスビ（カミムスヒ、カムムスビ）と考えられます。

記紀には、神代と人代が書かれています。神代は出雲神話を中心にあって、人代は神武東征からの皇室の歴史になってきて書紀では、持統天皇まで続いています。ということは人代は皇室に直接関係のある歴史で、それ以前の歴史は神代という事になっています。しかし歴史ではないとは言ってません。

今までは、神代はあるけれど論じないほうが良いとされてきました。代表的な人物は、江戸時代の山片 蟠桃（やまがた ばんとう）や戦後の津田左右吉などがおりました。

本当は皇室史の前に出雲王朝などが神話として語られていると解釈されます。つまり天皇前史が書かれていることになります。

解説：神原神社（かんばらじんじゃ）は島根県雲南市加茂町にある神社である。旧社地にあった古墳から「景初三年」の銘を有する三角縁神獣鏡が出土したことで知られる。

『出雲国風土記』大原郡条の神原郷の項に「所造天下大神之御財 積置給處也」とある。当初は大国主神のみを祀ったものと見られるが、宝永5年（1708年）に三刀屋天満宮宮司の広沢漆拾がまとめた『神原神社縁起』では祭神が磐筒男命・磐筒女命とされている。出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

解説：意宇郡（おうぐん）は島根県（出雲国）にあった郡。大化から天武天皇期にかけて順次設置されたとされる八神郡のひとつであり、律令制の施行により制定されたと考えられる。郡名の由来について『出雲国風土記』が伝えるところによれば、「八束水臣津野命（やつかみずおみつぬのみこと）」が国引きの大仕事を終えた際に「国引きを意恵（「おえ」、終わるの意味）」と言ったことから「意恵郡」のち「意宇郡」と呼ぶようになったという。熊野坐神社（熊野大社）の所在地として重んじられ、文武天皇2年（698年）3月9日には近親者の連任を許す詔が下されている。一般に郡（評）を治める郡司（評司）に近親者を続けて任命することは禁止されていたが、意宇郡では神社を代々まつってきた出雲氏が重視されたものである。出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

解説：神魂神社（かもすじんじゃ）は、島根県松江市大庭町にある神社である。旧社格は県社で、意宇六社の一社。本殿は現存する日本最古の大社造りで国宝。現在は伊弉諾大神（イザナミ）を主祭神とし、伊弉諾大神（イザナギ）を配祀するとしているが、これは中世末期ごろからのもので、それ以前の祭神は不明である。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：多氏（おおし／おおうじ）は、「多」を氏の名とする氏族。

日本最古の皇別氏族とされる。「太」「大」「意富」「飯富」「於保」とも記され、九州と畿内に系譜を伝える。皇別氏族屈指の古族であり、神武天皇の子の神八井耳命の後裔とされる。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：皇別（こうべつ）とは、日本の皇室から、神武天皇以降に臣籍降下した分流・庶流の氏族を分類した用語。弘仁6年（815年）に朝廷が編纂した古代氏族の系譜集『新撰姓氏録』で、天津神・国津神の子孫を指す神別、朝鮮半島・中国大陆その他から渡来した人々の子孫を指す諸蕃とともに用いられた。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：カミムスビ（カミムスヒ、カムムスビ）は、日本神話に登場する神。別天津神・造化三神のうちの1柱。『古事記』では神産巢日神、『日本書紀』では神皇産靈尊、『出雲国風土記』では神魂命と書かれる。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：山片 蟠桃（やまがた ばんとう、延享5年/寛延元年（1748年） - 文政4年2月28日（1821年3月31日））は、江戸時代後期の商人であり学者。極めて唯物論的な立場を取り、天文、宗教、経済、歴史等を百科全書的に論じた『夢の代』は、無鬼論（無神論）の主張、地動説の支持、応神天皇以前の日本書紀の真実性の否定など先進的な持論を展開した点が特筆される。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：津田 左右吉（つだ そうきち、1873年（明治6年）10月3日 - 1961年（昭和36年）12月4日）は、20世紀前半の日本の歴史学者・思想史家。『古事記』や『日本書紀』、特に神話関係の部分は後世の潤色が著しいとして文献批判を行った。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

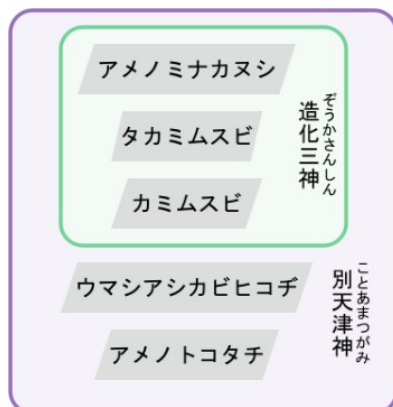
それでは何が重要になってくるのか。それは国産み神話です。下の表をご覧ください
『古事記』、『日本書紀』を国産み順に比較したものである。

古事記	日本書紀					
	本文	一書第1	一書第2	一書第3	一書第4	一書第5
淡道之穂之狭別島	淡路洲	大日本豊秋津洲	淡路洲・淡洲	淡路洲	淡路洲	淡路洲
伊豫之二名島	大日本豊秋津洲	淡路洲	大日本豊秋津洲	大日本豊秋津洲	大日本豊秋津洲	大日本豊秋津洲
隠伎之三子島	伊豫二名洲	伊豫二名洲	伊豫洲	伊豫二名洲	伊豫二名洲	淡洲
筑紫島	筑紫洲	筑紫洲	筑紫洲	億岐洲	筑紫洲	伊豫二名洲
伊岐島	億岐洲・佐度洲	億岐三子洲	億岐洲・佐度洲	佐度洲	吉備子洲	億岐三子洲
津島	越洲	佐度洲	越洲	筑紫洲	億岐洲・佐度洲	佐度洲
佐度島	大洲	越洲	大洲	壹岐洲	越洲	筑紫洲
大倭豊秋津島	吉備子洲	吉備子洲	子洲	對馬洲		吉備子洲
吉備兒島						大洲
小豆島						
大島						
女島						
知訶島						
兩兒島						

これは、イザナギ、イザナミが生んだ大八州（島）おおやしまの国とされます。
古事記は、本文のみですが、日本書紀には、本文の他一書第1～一書第5までの説があります。大八州の国といっても、一書第4は7州、一書第5は9州となっています。
この表の中に作った主体を見たのが通説です。
つまり大日本豊秋津州（大和）が中心となって作ってきたと考えています。

しかしこれらは作った主体は外にあって、8つの子分の国（州）を作ったと考えないと見え方がだいぶ違ってきます。出雲王朝は隠岐から始まって大国（州）に移ったと考えられます。また九州の王朝は、壹岐・對馬を中心にして始まったと考えられます。

表の古事記を見ますと大国（大州）がありません。これは出雲時代の国産み神話と考えられます。また日本書紀の本文から一書第5の中で、大国（大州）がないのは、出雲時代の国産み神話であり、壹岐州、對馬州がないのは、九州王朝時代の国産み神話であり、大国（大州）と壹岐州、對馬州がない（一書第1）のは、この3国が中心の国産み神話と考えられます。王権は、時代とともに変化（推移）していると考えられます。



壹岐・對馬の時代の神様は、高皇産靈尊タカミムスビです、大国（州）と壹岐・對馬時代は、オオクニヌシです。あとはカミムスビ（カミムスビ、カムムスビ）が、造化三神ではないかと考えます。

さらなる疑問があります。どうしてイザナギ、イザナミが中心となって国産み神話ができたのだろうか、という事です。

イザナギ、イザナミは、神話の中の最後の最後になって出てきます。そして神武東征に継っていきます。

イザナギ、イザナミとは、神武の親神ではないのか。

それまでの出雲や九州の神話を持ってきて（転用して）接続したのではないのか。岩波の文学体系では、イザナが魚だとして、ギが男、ミが女としていますが、しかし、イサとナギ・ナミではないか。海人族（あまぞく）の言葉ではないのか。



神話では、出雲王朝・九州王朝の歴史を王朝史の扱いをせずに、海人族の酋長の扱いをして、海人族史として扱っている事になります。そう考えられます。そうしたら神武皇統の姓が、「イサ」なのではないのか。検索しますと「イサ」の姓が一番多いのは、沖縄県です。「①沖縄県宜野湾市伊佐発祥。琉球王国時代に記録のある地名。琉球音もイサ。」と検索されました。

これは、「イサ」は南船系の倭人だったのではないのでしょうか。神武の両親は、博多湾岸の監視部隊長だったのかもしれませんが。このように日本の神話は、記紀にすべて取り込まれて、そこに人代部分を接続させていると言うことが出来ると思われれます。

最後に、垂仁記の謎（今井俊圀氏）より、銅鐸王国の終焉説話を紹介します。

垂仁天皇（すいにんてんのう）は、即位2年に彦坐王（天皇の伯父）の娘の沙本毘賣（さほひめのみこと）を皇后とした。即位3年、纏向珠城宮に都を移した。即位5年に皇后の兄の沙本毘古王（さほびこのみこ）が叛乱を起こし、皇后もこれに従って兄と共に焼死した。というものです。

『古事記』では沙本毘古王の元に走った皇后は皇子を妊娠しており、稲城で生まれた皇子を渡しに外へ出てきたとある。天皇は屈強な兵士を差し向けて皇后を奪還しようとするが失敗。諦めきれない天皇は子の名付けや育て方、後任の皇后について尋ねて時間稼ぎをしたがついに話すことも無くなり泣く泣く稲城に火を放ち、皇后は兄と共に焼死した。とあります。

『古事記』の垂仁天皇の条に、銅鐸王国の最後の王（古田武彦氏）・沙本毘古王（さほびこのみこ）の妹である沙本毘賣（さほひめのみこと）と、伊久米伊理毘古伊佐知命いくめいりびこいさちのみこと（垂仁）との間の子、本牟智和氣王ほむちわけのみことの説話が出てきます。

まず、本牟智和氣王が、生まれつき口がきけなく、八握りまで伸びた髭（『日本書紀』神代紀の一書に「是の時に、素戔鳴尊、年已としみに長いたり。復八握鬚髯（やつかひげ）生ひたり。」の文があり、「握」は小指から人差し指までの幅で、8 cm～10 cm。八握は64 cm～80 cm）が胸に垂れるまでに成長してもまだ口がきけなく、ある日、空を飛ぶ鶴を見て言葉らしきものをつぶやいたので、垂仁が、配下の山邊の大鷗おおつるにその後を追わせると、鶴は木國（紀伊）、針間國（播磨）、稲羽國（因幡）、旦波國（丹波）、多遲麻國（但馬）、近つ淡海國（近江）、三野國（美濃）、尾張國（尾張）、科野國（しなぬのくに）

(信濃)、高志國こしのくに(越)と飛んで、最後に山邊の大鷗が和那美の水門 わなみのみなと(不明)で鶴を捕まえて、都へ持ち帰り献上したとする説話があります。

これらの地域は、沙本毘古王が支配した銅鐸王国の領域を示していると考えられます。もちろん、垂仁（本拠地：奈良県桜井市）によって銅鐸王国の中枢部である大阪府茨木市一帯が攻撃を受け、最後の銅鐸王国王・沙本毘古王が殺された後、それらの地域は順次、垂仁の支配下に組み込まれていったと考えられます。

又、本牟智和氣王が口がきけないとするのは、彼が垂仁の後継者としてふさわしくない人物である事を強調する目的で作られた説話と考えられます。これは垂仁の跡を継いだ景行によって作られたと考えられます。

次に、本牟智和氣王が口がきけないのを心配した垂仁の夢枕に、ある神が現れ「私を祀っている神殿を、天皇の御殿のように立派に修理するならば、皇子は口がきけるようになるだろう」と告げた。そこで、太占で占うと、この祟りは出雲の大神によるものである事がわかり、大神の宮を拝ませる為に、本牟智和氣王を出雲に差し向ける事にしたとする説話は、沙本城制圧後、旧銅鐸王国を統治する為には本牟智和氣王が必要だったけれども、彼が成人する間に治安も安定したのでお役御免になり、簡単に殺す事も出来ないのも、出雲の大神宮に病氣平癒をさせるという名目で追放したという説話だと考えられます。

では何故出雲なのか？との問いに対する答えは、『出雲國風土記』仁多郡(島根県仁多町)の条に、三澤の郷、郡家の西南のかたじきょう五里なり。大神大穴持命の御子、阿遲須枳高日子命あじすきたかひこねのかみ、御須髪（みひげ）八握に生ふるまで、夜晝哭きまして、み辭通じつうはざりき。その時、御祖の命、御子を船に乗せて、八十嶋を率て巡りてうらがし給へども、猶哭き止みまさざりき。大神、夢に願ぎ給ひしく、「御子の哭く由を告らせ」と夢に願ぎませば、その夜、御子み辭通ふと夢見ましき。則ち、寤（さ）めて問ひ給へば、その時「御澤みさわ」と申したまひき。その時「何處を然いふ」と問ひ給へば、命て、御祖の前を立ち去り出でまして、石川を度り、坂の上に至り留まり、「是處ぞ」と申したまひき。その時、其の澤の水活れ出でて、御身沐浴みましき。故、國造、神吉事奏しに朝廷に参向かふ時、其の水活出でて、用ゐ初むるなり

とあり、大穴持命の子の阿遲須枳高日子命あじすきたかひこねのかみが、成人するまでの夜泣きが止まらず口がきけなかったで、夢に願うと、その夜、御子の口がきけるようになった夢をみた。それで、目覚めて御子に声をかけると「三澤」と言った。「何処の事か」と問うと、御子は立ち上がり戸外に出て、川を渡り坂の上に立ち止まり「ここ」と言った。その沢の水で沐浴している内に、口がきけるようになったとする説話です。

そこは、島根県仁田町の三沢町原田にある「三津田の泉」とされています。ほとんどこの本牟智和氣の説話と同じであり、出雲の説話が近畿地方でも有名であり、それを垂仁が利用したのだと考えられます。

また古田武彦氏は、『よみがえる卑弥呼』の中でこの説話を紹介し、「朝廷」とあるのは、一般的に言われている「大和の朝廷」ではなく、「出雲の朝廷」であるとしています。

その後、出雲から本牟智和氣王が都(大和)に戻った形跡がありません。本牟智和氣王の記述が途絶えるのです。彼が都に戻ったのなら、当然、垂仁の後を継いで天皇になるはずです。しかし、跡を継いだのは景行でした。：垂仁記の謎（今井俊罔氏）より部分掲載

今度は考古学から見ると滋賀県守山市の伊勢遺跡（東西700m南北450m30ヘクタール）で環濠集落が見つかりしています。（右の写真）

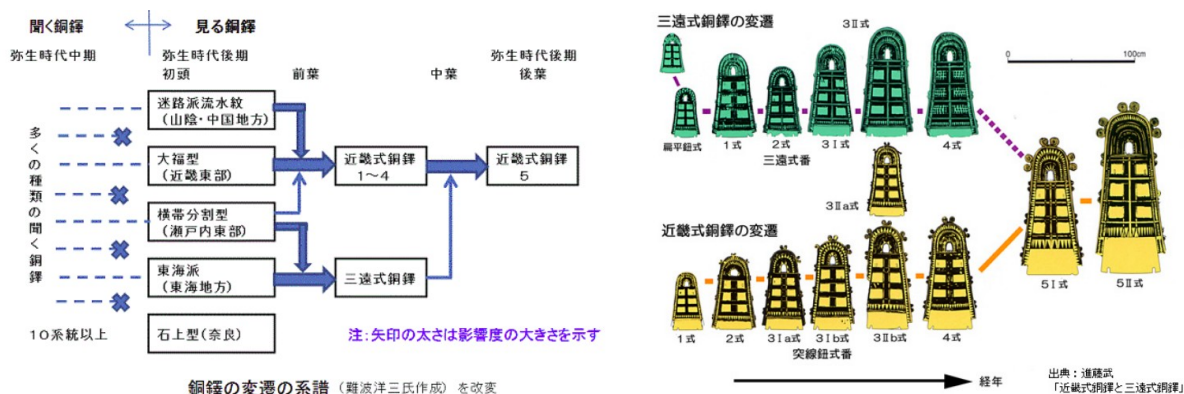
ここは縄文時代から室町時代にかけての複合遺跡であり、特に弥生時代後期の国内最大級の大型建物群で知られています。

さらに野洲川下流域の銅鐸・青銅器の特徴について見ると、野洲市の大岩山では、24個の銅鐸（どうたく）が出土しており、一ヶ所から見つかった銅鐸の数としては、島根県の加茂岩倉遺跡の39個に次いで多い数です。大岩山銅鐸には、日本最大の銅鐸が含まれています。また、栗東市の下鈎遺跡からは日本最小の銅鐸が見つかりしています。



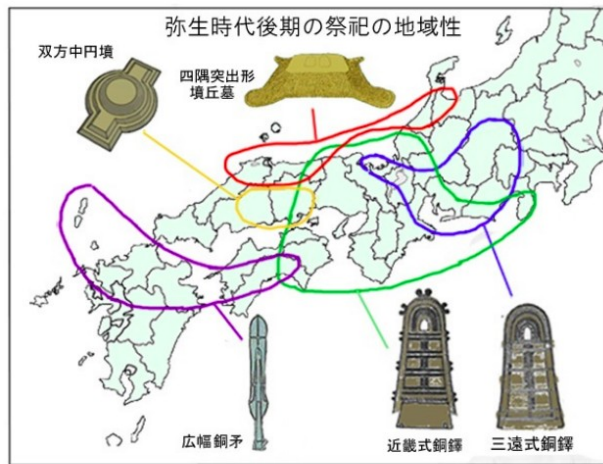
そのほか近江南部での銅鐸、青銅器に関して特徴的なことは：

- ①もっとも古い銅鐸から新しい銅鐸まで100～150年にわたるいろいろな銅鐸が出ている
- ②ここで銅鐸の形式の統合が行われたと考えられる（下図）
- ③銅鐸祭祀の最後を飾って大岩山に多量に埋納された
- ④銅剣が出土する最東地点である・・・こと。



大岩山銅鐸弥生時代を特徴付ける金属器として、銅矛（どうほこ）、銅剣、銅戈（どうか）、銅鐸などがあります。地域と時代によって何を祭祀に用いていたかが異なりますが、野洲川下流域では、銅鐸の祭祀が弥生時代を通して行われていました。

明治14年（1881年）に野洲市小篠原の山の中で遊んでいた子供によって、14個の銅鐸が偶然見つかりました。また、昭和37年（1962年）、東海道新幹線の工事に関連して10個の銅鐸が見つかりました。平成8年（1996年）加茂岩倉遺跡で39個の銅鐸が出土するまでは、1ヶ所で発見された銅鐸の数としては、日本最多でした。また、総長135cmと、群を抜いて大きな銅鐸が見つかり、日本最大の銅鐸です。



出典：寺沢薫「王権誕生」に基づき作成

銅鐸は入れ子にし、向きを揃えて、聖なる三上山の麓に埋納されており、弥生時代の幕引きの祭祀が行われたと考えられています。

これらの銅鐸の特徴は、大福型、近畿式、三遠式などいろいろな形式のものがあること、また製作時期についても西暦50年ごろのものから西暦150～200年頃のものまでいろいろな時代の銅鐸があることです。

銅鐸表面に付けられている文様も、流水紋のものが1個ありました。バリエーションに富んだ銅鐸の種類から考えると、びわ湖周辺の拠点集落それぞれが保有し、祭祀を行っていた銅鐸を持ち寄って、埋納祭祀をおこなったと考えられています。

埋納場所も、明治と昭和に発見された場所が50mほど離れており、2回に分けて埋納されたと解釈されます。ただ、昭和に見つかった流水紋銅鐸1個はさらに50m離れた所から見つかり、3回埋納説もあります。

銅鐸の用途ですが、主として弥生初期末から中期につくられた小～中型の銅鐸は音を鳴らして「聞く銅鐸」で、弥生後期の中～大型銅鐸は飾って「見る銅鐸」と言われています。すなわち銅鐸の用途は、中期と後期で大きく異なっていました。

この観点で大岩山の銅鐸を見ると、主に中～大型の「見る銅鐸」になります。

大岩山に銅鐸を埋納した後は、鏡が祭祀に用いられるようになります。その後は、銅鐸は造られなくなり、大岩山の最大の銅鐸は、銅鐸の歴史では最新でかつ最後の銅鐸になります。

栗東市の下鈎遺跡からは、弥生時代中期の導水施設で高さ3.5cmの日本最小の銅鐸が見つかっています。



大岩山で見つかった銅鐸 【野洲市教委】



日本で数十個の小銅鐸が見つっていますが、「聞く銅鐸」や「見る銅鐸」とは違う目的で用いられたようです。大きな銅鐸が山麓や集落のはずれに埋納されるのに対し、小銅鐸は集落から見るかるケースが多いようです。下鈎遺跡の小銅鐸は、聖なる水を得るための儀式で鈴のような使い方をしたのかも知れません。

大岩山銅鐸の外にも、野洲川下流域と周辺で9個の銅鐸が見つかっています。

守山市の新庄では、銅鐸の歴史の中でも古い形式の新庄銅鐸が1個出土しています。江戸時代の記録では4個見つっていますが、現存するのは1個のみで倉敷市に保管されています。野洲川下流域に隣接する東近江市の山面で、新庄銅鐸に継ぐ古さの銅鐸が2点見ついています。9個の銅鐸は、全般に大岩山銅鐸よりも古い形式のものが多く、「聞く銅鐸」として使われていました。

大岩山で見ついている新しい世代の「見る銅鐸」と考え合わせると、近江地区では古くから「聞く銅鐸」の祭祀が行われ、弥生時代後期には「見る銅鐸」の祭祀に変容しながらも銅鐸を使った儀礼が続いていたことが判ります。

銅鐸は主に山陰、四国、近畿、東海などで使われていましたが、弥生中期（聞く銅鐸）～弥生後期（見る銅鐸）を通して使っていたのは近江を含む近畿だけです。

守山市の下長遺跡（しもながいせき）から銅鐸の飾耳が一点出土しています。下長遺跡は弥生時代後期に出現し、伊勢遺跡群の一つとして機能していました。

しかし、下長遺跡が最も栄えるのが古墳時代に入ってからで、豪族の居館が建ち、河川・湖上貿易の拠点となります。

すなわち、銅鐸の祭祀の終焉に立会い、その後の鏡の祭祀を行った遺跡です。

そこから埋納したはずの銅鐸の飾り耳を切り落としたものが出土したのです。およそ70cmクラスの銅鐸の飾耳だと推測されますが、対応する銅鐸は見つかりません。

青銅器は非常に堅固で銅剣や銅矛として用いられるものでもあり、銅鐸も叩いて割れるものではありません。また、簡単に切り落とせるものでもありません。でも、高温に加熱して柔らかくしたら切ることができます。銅鐸祭祀の終焉にあたり、これまで大切にしてきたものを忘れないために隠し持ったのか、あるいはお守りとして残したのかも知れません。



銅鐸をつくる鋳型が多く見つかり、銅鐸の生産拠点と見なされていたのは、北九州と近畿の摂津、大和（唐古・鍵）などです。面白いことに多量の銅鐸が出土している、島根や淡路島、和歌山からは鋳型が出ていません。

一方、銅鐸の出土が極めて少ない北九州で銅鐸の鋳型が見つかりました。近江は銅鐸の出土も多く、銅鐸の鋳型や青銅器生産に関連するふいご部品が見つかりました。

銅鐸の鋳型としては、守山市の服部遺跡や栗東市の下鉤遺跡、野洲市の下々塚遺跡から見つかっており、とくに下鉤遺跡からは青銅残滓（ざんし）が出ており、青銅器をつくっていたのは間違いないと考えられます。

興味深いのは、服部遺跡から大阪湾型銅戈の石製鋳型の一部が見つかったことです。銅鐸の鋳型も出ていることから服部遺跡で青銅品を鋳造していた可能性は強く、ここで大阪湾型銅戈を作って近畿湾岸圏へ供給していたと考えられます。

唐古・鍵遺跡でも「見る銅鐸」の土製鋳型が多数見つっていますが、大岩山の近畿式銅鐸は地元で設計し製作していた可能性があります。



上：土製鋳型の内面と下：外面



鋳型（服部遺跡）【守山市教委】



鋳型（服部遺跡）

【守山市教委】



鋳型と青銅残滓（下鉤遺跡）

【栗東市教委】

このように、野洲川下流域では弥生中期から後期にわたり銅鐸の祭祀を行っていて、銅鐸祭祀の終焉にあたり、大岩山に埋納して、弥生時代が終わっていること。

さらに野洲川下流域には日本で最小の銅鐸と最大の銅鐸があることなどから、出雲から近畿圏への変遷を考えると、近畿式銅鐸はここで生産していた可能性があると考えられます。 出典：NPO 法人 守山弥生遺跡研究会 ホームページより部分掲載（了）

解説：伊勢遺跡（いせいせき）は、滋賀県守山市伊勢町・阿村町・栗東市野尻にある遺跡。国の史跡に指定されている。縄文時代から室町時代にかけての複合遺跡であり、特に弥生時代後期の国内最大級の大型建物群で知られる。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：造化三神とは、高天の原（たかまのはら）に最初に成り出た独り神の三柱で、アメノミナカヌシ（天之御中主）、タカミムスヒ（高御産巢日）、カムムスヒ（神産巢日）を言います。その後も多くの神が生まれ、国生みの神として知られるイザナキ（伊耶那岐）とイザナミ（伊耶那美）が最後に登場します。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：イサ 【伊佐】 5 日本姓氏語源辞典 <https://name-power.net/fn/伊佐.html>

沖縄県、新潟県、東京都。

①沖縄県宜野湾市伊佐発祥。琉球王国時代に記録のある地名。琉球音もイサ。

②茨城県筑西市の中館付近（旧：伊佐郡）から発祥。平安時代に記録のある地名。山形県西置賜郡小国町伊佐領は経由地。江戸時代に記録のある地名。地名は伊達氏の領地で伊達氏の本姓の伊佐からと伝える。伊達ダテ参照。

③山口県美祢市伊佐町伊佐発祥。平安時代に「位佐」の表記で記録のある地名。

④コリア（朝鮮・韓国）系。創賜。尹を含む「伊」に「佐」を追加。福岡県北九州市門司区で 1963 年 4 月 26 日に帰化の記録あり。本姓は尹。尹イン参照

全国の銅鐸出土数

国別	出土数	I 菱環鈕式	II 外縁付鈕式	III 偏平鈕式	I + II + III [聞く銅鐸]	IV 突線鈕式
出雲	50	1	37	10	48	
摂津	34		12	14	26	7
淡路	15	1	5	2	8	1
河内	18		1	11	12	4
大和	19		7	6	13	5
紀伊	38		3	13	16	14
讃岐	20		4	7	11	1
阿波	41		3	22	25	8
近江	36		3	2	5	22
三河	28		1	1	2	11
遠江	29		1		1	27
その他	135	2	32	38	72	43

・国別で出土数の多い地域(≥ 15)のみを示した。うち型式の判明分を I ～IV 式に分類。

・ I ～III 式および IV-1 式：「聞く銅鐸」、IV-2 ～IV-5：

「見る銅鐸」[佐古和枝氏作成の分布図より]

解説：「柿本人麻呂」終焉の地

その終焉の地も定かではない。有力な説とされているのが、現在の島根県益田市（旧・石見国）である。地元では人麻呂の終焉の地としては既成事実としてとらえ、高津柿本神社としてその偉業を称えている。しかし人麻呂が没したとされる場所は、益田市沖合にあったとされる、鴨島である。「あった」とされるのは、現代にはその鴨島が存在していないからである。そのため、後世から鴨島伝説として伝えられた。鴨島があったとされる場所は、中世に地震（万寿地震）と津波があり、水没したといわれる。この伝承と人麻呂の死地との関係性はいずれも伝承の中にあり、県内諸処の説も複雑に絡み合っているため、いわゆる伝説の域を出るものではない。

その他にも、石見に帰る際、島根県安来市の港より船を出したが、近くの仏島で座礁し亡くなったという伝承がある。この島は現在の亀島と言われる小島であるという説や、河砂の堆積により消滅し日立金属安来工場の敷地内にあるとされる説があり、正確な位置は不明になっている。また他にも同県邑智郡美郷町にある湯抱鴨山の地という斎藤茂吉の説があり、益田説を支持した梅原猛の著作（前述）で反論の的になっている。

解説：垂仁天皇（すいにんてんのう、崇神天皇 29 年 1 月 1 日 - 垂仁天皇 99 年 7 月 14 日）は日本の第 11 代天皇（在位：垂仁天皇元年 1 月 2 日 - 垂仁天皇 99 年 7 月 14 日）。

『日本書紀』での名は活目入彦五十狭茅天皇。治世には様々な起源伝承が語られる。

御間城天皇（崇神天皇）の第 3 皇子。生母は皇后の御間城姫命（みまきひめのみこと、大彦命の娘）である。兄の豊城入彦命をこえて、24 才で皇太子に立てられる。

父帝が崩御した翌年の 1 月 2 日に即位。即位 2 年に彦坐王（天皇の伯父）の娘の狭穗姫命を皇后とした。即位 5 年に皇后の兄の狭穗彦王が叛乱を起こし、皇后もこれに従って兄と共に焼死した。

狭穗彦の謀反

即位 2 年、狭穗姫を立后。即位 3 年、纏向珠城宮に都を移した。即位 5 年、天皇の従弟にあたる狭穗彦は妹の皇后を唆して天皇を暗殺しようとした。「夫と兄のどちらが愛しいか」と問われ「兄」と答えた皇后は短刀を渡され、寝ている天皇を刺せと告げられた。断ることができなかった皇后は、しかしもう少しというところでどうしてもできず天皇にすべてを打ち明けた。天皇は狭穗彦を討伐することにしたが、兄を見捨てられない狭穗姫は自分が生んだ誉津別命を連れて狭穗彦の元に走った。長らく攻めあぐねた天皇がついに狭穗彦の稲城に火をつけると狭穗姫が飛び出してきた。しかし皇后は誉津別命だけを預けて燃える城の中に戻ってしまい、そのまま兄と共に焼け死んでしまった。

『古事記』では狭穗彦の元に走った皇后は皇子を妊娠しており、稲城で生まれた皇子を渡しに外へ出てきたとある。天皇は屈強な兵士を差し向けて皇后を奪還しようとするが失敗。諦めきれない天皇は子の名付けや育て方、後任の皇后について尋ねて時間稼ぎをしたがついに話すことも無くなり泣く泣く稲城に火を放ち、皇后は兄と共に焼死した。

『古事記』の垂仁天皇の条に、銅鐸王国の最後の王（古田武彦氏の分析）・沙本毘古王の妹である沙本毘賣と、「伊久米伊理毘古伊佐知命（垂仁）」との間の子、本牟智和氣王の説話が出てきます。この説話についての私の分析を紹介します。

まず、本牟智和氣王が、生まれつき口がきけなく、八握りまで伸びた髭(『日本書紀』神代紀の一書に「是の時に、素戔鳴尊、年已に長いたり。復八握鬚髯生ひたり。」の文があり、「握」は小指から人差し指までの幅で、8 cm～10 cm。八握は64 cm～80 cm)が胸に垂れるまでに成長してもまだ口がきけなく、ある日、空を飛ぶ鶴を見て言葉らしきものをつぶやいたので、垂仁が、配下の山邊の大鷗にその後を追わせると、鶴は木國（紀伊）、針間國(播磨)、稻羽國(因幡)、旦波國(丹波)、多遲麻國(但馬)、近つ淡海國(近江)、三野國(美濃)、尾張國(尾張)、科野國(信濃)、高志國(越)と飛んで、最後に山邊の大鷗が和那美の水門(不明)で鶴を捕まえて、都へ持ち帰り献上したとする説話があります。私はこれらの地域が、沙本毘古王が支配した銅鐸王国の領域を示していると考えています。もちろん、垂仁によって銅鐸王国の中核部である大阪府茨木市一帯が攻撃を受け、最後の銅鐸王国王・沙本毘古王が殺された後、それらの地域は順次、垂仁の支配下に組み込まれていったのです。又、本牟智和氣王が口がきけないとするのは、彼が垂仁の後継者としてふさわしくない人物である事を強調する目的で作られた説話と解せます。勿論、垂仁の跡を継いだ景行によって作られたのです。

次に、本牟智和氣王が口がきけないのを心配した垂仁の夢枕に、ある神が現れ「私を祀っている神殿を、天皇の御殿のように立派に修理するならば、皇子は口がきけるようになるだろう」と告げた。そこで、太占で占うと、この祟りは出雲の大神によるものである事がわかり、大神の宮を拝ませる為に、本牟智和氣王を出雲に差し向ける事にしたとする説話は、沙本城制圧後、旧銅鐸王国を統治する為には本牟智和氣王が必要だったけれども、彼が成人する間に治安も安定したのでお役御免になり、簡単に殺す事も出来ないのも、出雲の大神宮に病氣平癒をさせるという名目で追放したという説話だと考えられます。

では何故出雲なのか？との問いに対する答えは、『出雲國風土記』仁多郡(島根県仁多町)の条に、

三澤の郷、郡家の西南のかた廿五里なり。大神大穴持命の御子、阿遲須枳高日子命、御須髪八握に生ふるまで、夜晝哭きまして、み辭通はざりき。その時、御祖の命、御子を船に乗せて、八十嶋を率て巡りてうらがし給へども、猶哭き止みまさざりき。大神、夢に願ひ給ひしく、「御子の哭く由を告らせ」と夢に願ひませば、その夜、御子み辭通ふと夢見ましき。則ち、寤めて問ひ給へば、その時「御澤」と申したまひき。その時「何處を然いふ」と問ひ給へば、命て、御祖の前を立ち去り出でまして、石川を度り、坂の上に至り留まり、「是處ぞ」と申したまひき。その時、其の澤の水活れ出でて、御身沐浴みましき。故、國造、神吉事奏しに朝廷に参向かふ時、其の水活出でて、用ゐ初むるなり

とあり、大穴持命の子の阿遲須枳高日子命が、成人するまでの夜泣きが止まらなく口がきけなかったで、夢に願うと、その夜、御子の口がきけるようになった夢をみた。

それで、目覚めて御子に声をかけると「三澤」と言った。「何処の事か」と問うと、御子は立ち上がり戸外に出て、川を渡り坂の上に立ち止まり「ここ」と言った。その沢の水で沐浴している内に、口がきけるようになったとする説話で、そこは、島根県仁田町の三沢町原田にある「三津田の泉」とされています。ほとんどこの本牟智和気の説話と同じであり、出雲の説話が近畿地方でも有名であり、それを垂仁が利用したのだと考えられます。

因みに、古田武彦氏は、『よみがえる卑弥呼』の中でこの説話を紹介し、「朝廷」とあるのは、一般的に言われている「大和の朝廷」ではなく、「出雲の朝廷」であるとされています。

次に、「奈良山越えの道(奈良市から奈良山を越えて、木津川へ抜ける道)を行けば、跛や盲に会うだろう。二上山を越える大坂道(奈良県葛城市から大阪府羽曳野市に抜ける、竹内街道)を行っても跛や盲に会うだろう。ただ紀伊に出る真土山越えの道(真土山は和歌山県橋本市東部にある山で、待乳山とも呼ばれ、『万葉集』等にも登場する山。奈良県五條市上野町から和歌山県橋本市真土に至る待乳峠を越える道は、大和から紀伊に抜ける南海道で、現在は国道24号線となっています。待乳峠越えの道は難所と言われてきたそうです)は、脇の入り口で縁起の良い道だ」という占いが出たとする説話は、奈良山越えや大坂道は人通りも多く、出雲へ行くには遠回りになる真土山越えの道の方が、人通りも少なく人目につかないので、それを利用した事を示していると考えられます。

次に、本牟智和気王が出雲の肥長比賣と一夜を共にするが、彼女が蛇である事がわかり、船に乗って逃げ出す。しかし、彼女は海原を照らして船を追いかけてくるので、山の低く谷になっている所から船を引き上げて、逃げ帰った。そして、「大神を拝んだので、御子の口がきけるようになりました。それ故、都へ戻ってまいりました。」と奏上した。という説話は、まず、「肥長比賣」は、「肥の長比賣」で、出雲の肥の川(斐伊川)流域にいた、蛇神信仰、蛇、竜神、海蛇をトーテムとする海人族の長の娘と思われます。長(なが)はサンスクリット語の「ナーガ」で、インドの蛇神です。「記紀」神話に出てくる「須佐之男の大蛇退治」説話は、古くからその地に蛇神信仰を持った海人族がいた事を示しています。

因みに、出雲大社には古くから伝えられている「龍蛇さま」を迎える神事があります。毎年、陰暦の十月十三日に行なわれます。神有月の十一日から七日間、出雲大社では神有祭が盛大に行われますが、その中の大切な行事として「龍蛇さま」の神事があります。陰暦十月といえば日本海は風がはげしく波も高い日が多い。この時に海蛇が波に乗って稲佐の浜におしよせてくる。その日、あらかじめ身を清めた神人が海辺に出かけ、泳いでくる海蛇「龍蛇さま」を玉藻の上に受ける。そして、大社の神殿に納めるという行事です。この海の彼方から神霊が龍や蛇の姿となって訪れるという信仰は、日本海沿岸や、韓国や新羅の東海沿岸にもあります。

又、「海原を光してくる」に関して、『古事記』大国主神の「少名毘古那神と国作り」にも、「この時に海を光して依り来る神ありき」とあり、古田武彦氏は『古代は輝いていた III 法隆寺の中の九州王朝』の中で、この神とは大年神であり、福岡県鞍手郡小竹町の亀山神社に祀られている「大歳神」としてされています。

そして、「都へ戻ってきた」と誰かが奏上しますが、おそらく御子と共に出雲に旅立った、曙立王と菟上王のどちらか、あるいは兩人でしょう。

しかし、彼等は戻りましたが、本牟智和氣王が都(大和)に戻った形跡がありません。その後、本牟智和氣王の記述が途絶えるのです。彼が都に戻ったのなら、当然、垂仁の後を継いで天皇になるはずですが、しかし、跡を継いだのは景行です。後継者が本牟智和氣王から景行に代わった経緯もなしに、本牟智和氣王が消息不明となり、景行が跡を継ぐのです。やはり、本牟智和氣王は「肥長比賣」から逃げた後、何処かに留め置かれたと考えるのが自然です。

私は、彼が山口県辺りにいたのではないかと考えています。と言うのは、「仲哀記」において、仲哀の死後、神功が御子を喪船に乗せて、「御子が既に崩じた」と風聞を撒いて都へと上ったとされています。私は、景行のあり得ない記述に満ちた系譜を調べ、景行・成務と仲哀には繋がりがなく、又、都が移動したとする説話もなしに、穴門の豊浦宮と筑紫の香椎宮に本拠を持ったとする『古事記』の記述から、仲哀は九州王朝の王族の一人であり、彼を暗殺した後、親百済政策の九州王朝内部に身の置き所を失った、新羅の王族の娘である神功が、品陀和氣命を擁立し、近江へと攻め上ったと考えています。品陀和氣命は、おそらく出雲から山口へと逃れた本牟智和氣王の子孫であり、神功が彼を擁立し、銅鐸王国再興を旗印にして東侵したのだと考えています。山口県は、仲哀の拠点の一つなのです。おそらくそこで、本牟智和氣王の子孫である品陀和氣命を見出したのだと思われます。景行・成務と仲哀に関係性がない以上、神功には東侵の大義名分がないからです。

事がなった後応神たちが、景行の系譜に九州王朝の征服王であったヤマトタケルの系譜を利用して仲哀を結びつけたのです。景行・成務と仲哀が、共に近畿王権の王者である、万世一系の天皇であるとする為に。

これは会報の公開です。新古代学の扉 インターネット事務局 E-mail はここから。

参考：出雲国風土記

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

『出雲国風土記』（いずものくにふどき）は、出雲国の風土記。編纂が命じられたのは和銅6年（713年）5月、元明天皇によるが、天平5年（733年）2月30日に完成し、聖武天皇に奏上されたといわれている。「国引き神話」を始めとして出雲に伝わる神話などが記載され、記紀神話とは異なる伝承が残されている。現存する風土記の中で一番完本に近い。

目次

- 1 編纂
- 2 構成
 - 2.1 総記
 - 2.2 意宇郡
 - 2.3 島根郡

- 2.4 秋鹿郡
- 2.5 楯縫郡
- 2.6 出雲郡
- 2.7 神門郡
- 2.8 飯石郡
- 2.9 仁多郡
- 2.10 大原郡
- 2.11 卷末
- 3 収録された説話
- 4 登場する神
- 5 写本
- 6 研究史
- 7 注釈
- 8 参考文献
- 9 外部リンク

編纂

713 年（和銅 6 年）に太政官が発した風土記編纂の官命により、出雲国国司は出雲国庁に出雲国造の出雲臣果安（いずもおみはたやす）を招き、出雲国風土記の編纂を委嘱した[1]。733 年（天平 5 年）になって、出雲国造の出雲臣広島（ひろしま）の監修のもと、秋鹿郡（あいかのこおり）の人、神宅臣金太理（かみやけのおみかなたり）の手によって出雲国風土記は編纂された[1]。

構成

総記、意宇・島根・秋鹿・楯縫・出雲・神門・飯石・仁多・大原の各郡、卷末から構成されている。

各郡には現存する他の風土記にはない神社リストがある。神祇官に登録されている神社とされていないものに分けられている。

自然の地形の項ではその地形の様子と特産品の情報が記されている。

総記

出雲国の概要が書かれている。

意宇郡

郷里に関しては意宇郡を参照のこと。

郷里

母理郷、屋代郷、楯縫郷、安来郷、山国郷、飯梨郷、舎人郷、大草郷、山代郷、拝志郷、穴道郷、余戸里

駅家

野城駅、黒田駅、宍道駅

神戸

出雲神戸、賀茂神戸、忌部神戸

寺院

教皇寺、新造院 3 所

神社

在神祇官社 48 所、不在神祇官社 19 所

地名

山野、河川、池、浜、島

通道

国堺への道、大原郡堺への道、出雲郡堺への道、島根郡堺への道

島根郡

郷里に関しては島根郡を参照のこと。

郷里

山口郷、朝酌郷、手染郷、美保郷、方結郷、加賀郷、生馬郷、法吉郷、余戸里

駅家

千酌駅

神社[2]

在神祇官社 14 所、不在神祇官社 45 所

地名

山野、河川、坡（人工の池）、池、渡、浜、埜、島

通道

意宇郡堺への道、秋鹿郡堺への道、隠岐への渡

秋鹿郡

郷里に関しては秋鹿郡を参照のこと。

郷里

恵曇郷、多太郷、大野郷、伊農郷

神戸

神戸里

神社

在神祇官社 11 所、不在神祇官社 16 所

地名

山野、河川、陂、池、浜、島

通道

島根郡堺への道、楯縫郡堺への道

楯縫郡

郷里に関しては楯縫郡を参照のこと。

郷里
佐香郷、楯縫郷、玖潭郷、沼田郷、余戸里
神戸
神戸里
寺院
新造院 1 所
神社
在神祇官社 9 所、不在神祇官社 19 所
地名
山、河川、池、浜、埼、島
通道
秋鹿郡堺への道、出雲郡堺への道
出雲郡
郷里に関しては出雲郡を参照のこと。

郷里
健部郷、漆沼郷、河内郷、出雲郷、杵築郷、伊努郷、美談郷、宇賀郷
神戸
神戸郷
寺院
新造院 1 所
神社
在神祇官社 58 所、不在神祇官社 64 所
地名
山野、河川、池、江、浜、埼、島
通道
意宇郡堺への道、神門郡堺への道、大原郡堺への道、楯縫郡堺への道
神門郡
郷里に関しては神門郡を参照のこと。

郷里
朝山郷、（日）置郷、塩冶郷、八野郷、高岸郷、古志郷、滑狭郷、多伎郷、余戸里
駅家
狭結駅、多伎駅
神戸
神戸里
寺院
新造院 2 所
神社
在神祇官社 25 所、不在神祇官社 12 所

地名

山野、川、池、水海、浜

通道

出雲郡堺への道、飯石郡堺への道、石見国堺への道

飯石郡

郷里に関しては飯石郡を参照のこと。

郷里

熊谷郷、三屋郷、飯石郷、多禰郷、須佐郷、波多郷、来嶋郷

神社

在神祇官社 5 所、不在神祇官社 16 所

地名

山野、河川

通道

大原郡堺への道、仁多郡堺への道、神門郡堺への道、備後国堺への道

仁多郡

郷里に関しては仁多郡を参照のこと。

郷里

三處郷、布勢郷、三沢郷、横田郷

神社

在神祇官社 2 所、不在神祇官社 8 所

地名

山野、河川

通道

飯石郡堺への道、大原郡堺への道、伯耆国堺への道

大原郡

郷里に関しては大原郡を参照のこと。

郷里

神原郷、屋代郷、屋裏郷、佐世郷、阿用郷、海潮郷、来次郷、斐伊郷

寺院

新造院 3 所

神社

在神祇官社 13 所、不在神祇官社 16 所

地名

山野、河川

通道

意宇郡堺への道、仁多郡堺への道、飯石郡堺への道、出雲郡堺への道

卷末

出雲国の官道を中心にした主要な道網や駅・橋・渡船、軍団、烽（とぶひ）、戍（まもり）が記載され、奥付が記されている。

収録された説話

すべての郷に地名起源の説話が掲載されているが、ほとんどが断片的にのみ収録されている。ある程度まとまった形で収録された説話には以下のものがある。

国引き神話

意宇郡の条の冒頭に記載され、郡名の由来に結び付けられている。詳細は国引き神話を参照のこと。

毘売埼伝承

安来郷のスサノヲの地名説話に続けて記載されている。語臣猪麻呂の娘が埼で遊んでいる時に和爾に襲われてしまった。猪麻呂は娘の死を悲しみ数日間泣き崩れた後、和爾に復讐することを決心する。武器を持って埼に座り込み、神々に一心に祈ると和爾の大群がやって来て1匹の和爾を取り囲んでいた。猪麻呂がその和爾を討ち取り腹を割くと娘の足が出てきた。和爾は串刺しにされて路傍に立て掛けられた。

加賀神埼（かかのかんざき）

現在の加賀の潜戸にあたる。ここで枳佐加比売命が佐太大神を産む時に弓矢をなくした。この時「生まれてくる子が麻須羅神の子ならば、なくなった弓矢よ出てこい」とうけいをした。すると弓矢が出てきたが、「これは違う」と言ってやり直した。再び出てきた金の弓矢を枳佐加比売命が手に取り、岩屋を射通した。いわゆる丹塗り矢型神話の変形といえる。

恋山（したいやま）

現在の鬼の舌震にあたる。和爾が阿井村の玉日女命を慕って川を遡上したが、玉日女命は嫌がって岩で川を塞いでしまった。

阿用郷

ある男が畑仕事をしていると突然目一つの鬼が現れて食われてしまった。その時彼の両親は竹藪の中に身を隠していた。男は「動動（あよあよ）」と叫んだ。

登場する神

『古事記』や『日本書紀』に登場する神もいくつか登場するが、当風土記にのみ登場する神も多い。ここでは複数の地名説話で名が挙げられた神とその妻や子らのみを挙げる。神名の漢字表記は最初に登場したものを採用し、読みの「のみこと」は省略する。

八束水臣津野命（やつかみずおみつの）

「八雲立つ」の言葉を発し、この国を出雲と命名したとされる。国引き神話において遠方の土地を引っ張って出雲国を形成した。『古事記』のスサノヲの系譜に名が見える「淤美豆奴神」と同一神と見られる。

子に以下の神がいる。

赤衾伊農意保須美比古佐和気命（あかぶすまいぬおおすみひこさわけ） - 出雲郡伊努郷（妻、天甕津日女命（あめのみかつひめ） - 秋鹿郡伊農郷）

所造天下大神（あめのしたつくらししおおかみ）大穴持命（おおなもち）
当風土記では最も登場回数が多い神である。「越の八口」を平定して出雲に帰還した後に
意宇郡母里郷で国譲りの宣言を発した。神門郡を中シエ族心として妻問いの説話が多い。
大原郡では八十神を討つために行動を起こしている。
妻問いの相手として、
奴奈宜波比売命（ぬながわひめ） - 島根郡美保郷、『古事記』の沼河比売。
綾門日女命（あやとひめ） - 出雲郡宇賀郷
真玉著玉之邑日女命（またまつくたまのむらひめ） - 神門郡朝山郷
八野若日女命（やのわかひめ） - 神門郡八野郷
和加須世理比売命（わかすせりひめ） - 神門郡滑狭郷
が登場し、また子に以下の神がいる。
山代日子命（やましろひこ） - 意宇郡山代郷
阿遲須枳高日子命（後述）
御穂須須美命（みほすすみ、） - 島根郡美保郷、奴奈宜波比売命との子で、建御名方神と
同一視されることもある。
和加布都努志能命（わかふつぬし） - 秋鹿郡大野郷、出雲郡美談郷
阿陀加夜努志多伎吉比売命（あだかやぬしたききひめ） - 神門郡多伎郷
意支都久辰為命（おきつくしい）
越の奴奈宜波比売命の祖父
俣都久辰為命（へつくしい）
越の奴奈宜波比売命の父
布都努志命（ふつぬし）
意宇郡の楯縫郷と山国郷に登場する。
神須佐乃烏命（かむすさのお）
記紀と異なり自身の登場回数は少なく、大穴持命との血縁関係は伺えない。意宇郡安来郷、
飯石郡須佐郷、大原郡佐世郷と御室山に登場する。須佐郷で自らの御魂を鎮めた。
子として、
青幡佐久佐日古命（あおはたさくさひこ） - 意宇郡大草郷、大原郡高麻山
都留支日子命（つるぎひこ） - 島根郡山口郷、難波田使主の系図には神櫛玉命の息子で陶
津耳命の兄弟とある。
国忍別命（くにおしわけ） - 島根郡方結郷
磐坂日子命（いわさかひこ） - 秋鹿郡恵曇郷
衝梓等乎而留比古命（つきほことおるひこ） - 秋鹿郡多太郷
八野若日女命（前出、大穴持命の妻問いの相手）
和加須世理比売命（同上）
が登場する。また飯石郡熊谷郷には記紀で妻となるクシナダヒメと同一神と見られる久志
伊奈太美等与麻奴良比売命（くしいなだみとよまぬらひめ）が登場する。
伊弉奈枳命（いざなぎ）
自身は登場せず、子として以下の神が登場する。

熊野加武呂命（くまのかむろ）（熊野大神） - 意宇郡出雲神戸、島根郡朝酌郷、須佐之男命と同一視される。

都久豆美命（つくづみ） - 島根郡千酌駅

阿遲須枳高日子命（あぢすきたかひこ）

神門郡高岸郷と仁多郡三沢郷において父の大穴持命に養育される様子が描かれており、葛城の賀茂社に鎮座していると記されている。

妻として

天御梶日女命（あめのみかじひめ）、楯縫郡神名樋山に登場）

がおり、子に以下の神がいる。

多伎都比古命（たきつひこ） - 楯縫郡神名樋山、天御梶日女命との子

塩冶毘古命（やむやびこ） - 神門郡塩冶郷

神魂命（かみむすび）

自身は楯縫郡の郡名の由来において所造天下大神の宮の造営を命ずるのみで、これ以外は以下に挙げる子らの説話のみとなっている。

八尋鉾長依日子命（やひろほこながよりひこ） - 島根郡生馬郷

宇武賀比売命（うむかひめ） - 島根郡法吉郷、『古事記』の蛤貝比売。

枳佐加比売命（きさかひめ） - 島根郡加賀神埼、『古事記』の蜃貝比売。

天御鳥命（あめのみとり） - 楯縫郡郡名、紀国造系図では彦狭知命の別名とされる。

天津枳値可美高日子命（あまつきちかみたかひこ）（薦枕志都治値（こもまくらしつじち）） - 出雲郡漆治郷

綾門日女命（前出、大穴持命の妻問いの相手）

真玉著玉之邑日女命（同上）

佐太大神（さだのおおかみ）

島根郡加賀神埼で枳佐加比売命が産んだ子。秋鹿郡神名火山に鎮座した。

宇乃治比古命（うのぢひこ）

楯縫郡沼田郷と大原郡海潮郷に登場する。海潮郷では父の須義禰命（すがね）に対して怒り、海水で押し流した。

写本

現存する写本は70種程あるが、その中で最も古いと考えられるのは慶長2年（1597年）に細川幽斎が書写させたもの（細川家本）と考えられている。

そのほか尾張徳川家に伝わった写本（徳川家本）や上賀茂神社に伝わる万葉緯本など、近世初期から多くの写本がつくられ各地に広まった。尾張徳川家徳川義直により寄進されたと伝えられる日御碕神社所蔵の写本（寛永11年（1634年）書写、通称日御碕本）は、島根県指定有形文化財に指定されている。

なお『出雲国風土記』の引用例としては、文亀2年（1502年）の巻物『灰火山社記』が最古になる[3]。

研究史

江戸時代初期より研究が進められており、多くの注釈書や解説書が出されている。

岸崎（佐久次）時照『出雲風土記鈔』（天和3年（1683年））

内山真龍『出雲風土記解』（天明7年（1787年））

千家俊信『訂正出雲風土記』（文化3年（1806年））

横山永福『出雲国風土記考』（弘化3年（1846年）頃）

後藤蔵四郎『出雲国風土記考証』（大岡山書店、1931年）

加藤義成『出雲国風土記参究』（原書房、1962年）

など

シェ族

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

ナビゲーションに移動検索に移動

シェ族

活聶

総人口

700,000

居住地域

中国:福建省、浙江省、江西省、広東省、安徽省

言語

シェ語

宗教

アニミズム、佛教

関連する民族

ヤオ族、ミャオ族

シェ族（シェぞく、畚族、あるいはショー族、シャ族、ショオ族）は中国の少数民族のひとつであり、中華人民共和国が公式に規定する漢族を含む56の民族のひとつである。

シェ族は福建省における最多の少数民族である。また、浙江省、江西省、広東省、安徽省にも居住している。

福建省・連江県には小滄シェ族郷があり、浙江省には景寧シェ族自治県がある。

シェ語はミャオ・ヤオ語族に属する。ただし、現在シェ族の大部分は近隣にいる客家と同じように中国語諸語の客家語を話す。独自の言語を保持する人々は広東省に数百人居るだけであるが、彼らは自分たちを「Hone」（中国語: 活聶 huóniè）と呼んでいる。

目次

- 1 文化
- 2 著名人
- 3 脚注
- 4 関連項目
- 5 外部リンク

文化

シェ族にはヤオ族にも共通する槃瓠の犬祖伝説に因む始祖伝説があり、犬をトーテムとする信仰が見られる。犬に関する伝承や習俗、犬肉食に関するタブーなど、犬トーテムは民族文化の核となっている[1]。

年中行事として、チワン族と同じく旧暦3月3日を「三月三」（ソムギュエッソム）と称して祝う。「畚歌」（シェコー）と呼ばれる即興の歌を歌う。また、広東省のシェ族ではかつて「招兵」と呼ばれる大規模な道教儀礼が行われていたが、漢族との同化が進んだ1950年代を境に実施されなくなっている[1]。

女性は、伝統的には頭に「三把刀」と呼ばれる刀に似た形の金属片3枚を飾りとして身につけた。

チワン族と同じく、棒状の手杵と飼い葉桶のような形の臼を使って餅つきを行う伝統がある。また、餅つき歌や踊りがある。

大祓詞(六月晦大祓祝詞) 部分

（ミナズキのツゴモリのオオハラへのノリト）

（「注：天津罪部分～」）

あまつつみと あぜはなち みぞうめ ひはなち しきまき くしざし いきはぎ さかはぎ
くそへここだくのつみを
天津罪と 畦放 溝埋 樋放 頻蒔 串刺 生剥 逆剥 屎戸 許々太久の罪を

あまつつみとのりわけて
天津罪と法別て

（「注：国津罪部分～」）

くにつつみと いきはだたち しにはだたち しろひと こくみ おのがははおかせるつみ
おのがこおかせるつみ
国津罪と 生膚断 死膚断 白人 胡久美 己が母犯罪 己が子犯罪

ははとことおかせるつみ ことははとおかせるつみ けものおかせるつみ
母と子と犯罪 子と母と犯罪 畜犯罪

はふむしのわざわひ たかつかみのわざわひ たかつとりのわざわひ
昆虫の災 高津神の災 高津鳥の災

けものたふしまじものせるつみ ここだくのつみいでむ
畜仆し蟲物為罪 許々太久の罪出でむ

1、天孫降臨に始まる九州王朝

我国には大和朝廷（＊近畿天皇家）に先行し、九州を本拠とする王朝が存在していました。この王朝は、紀元前二?三世紀頃、朝鮮海峡を拠点とする天照（あまてる）や邇邇芸命（ににぎのみこと）ら海人（あま）族による、大陸渡りの「青銅の武器」を使っの博多湾岸への侵攻（＊「記紀神話」では「天孫降臨てんそんこうりん」とされる）に始まりました。そして大国（＊出雲）ら旧勢力を駆逐し（＊同「国譲り」とされる）、北部九州の支配権を固め、以降、日子穗穗手見命（ひこほほでみのみこと）ら歴代の王は、徐々に九州全域に勢力を拡大していきました。

2、海外史書に見える九州王朝と見えない近畿天皇家

彼らの事績は「海外史書」に残されており、一世紀には『後漢書』にある委奴国王が漢の光武帝から金印（＊志賀島の金印）を下賜され（五七年）、二世紀には「帥升すいしょう」が漢に遣使しました。彼は九州王朝で名前の見える最初の王です（一〇七年）。そして、三世紀には『魏志倭人伝』で著名な邪馬壹（やまる）国の「親魏倭王」卑弥呼（ひみか）・壹予（ゐよ）が魏と交流します。さらに『宋書』等に見える五世紀の「倭の五王（＊讃、珍、済、興、武）」は九州王朝の王たちであり、『隋書』には、七世紀初頭に「日出る処の天子」を自認する阿每多利思北孤（あまのたりしほこ）が隋に遣使し、その国には「阿蘇山有り」と記されています。

また海外史書には見えませんが『日本書紀』の「神功皇后」の「モデル」にされた四世紀の「高良玉垂命こうやたまたれのみこと」や、継体に討たれたとされている、六世紀の「筑紫の君磐井」も九州王朝の王でした。さらに、近畿天皇家の「祖」とされる「神武」はその「分流」だったと考えられます。

従って、これら漢・魏・宋・隋ほか多くの海外史書に記される、歴代中国王朝や、高句麗・新羅・百済との交流は九州王朝の事績だったのです。

一方、大和朝廷の史書である『古事記』『日本書紀』には、これら海外史書に記す王や天子は記されておらず、また、逆に海外史書に近畿天皇家の天皇名が見えません。これは大和朝廷以前の我が国の支配者が九州王朝であったことを物語っています。

3、倭国全体を統治していた九州王朝

九州王朝は倭の五王の時代、「倭王武」の上表文に見られるように九州のみならず東方（＊毛人国）、北方（＊韓半島）を支配していました。また「筑紫の君磐井」は、五一七年に最初の九州年号「継体」をたて、「磐井の律令」を制定します。そして、六世紀末には多利思北孤が物部氏を滅ぼし河内・難波を制圧、東国に直接の支配権を確立しました。七世紀に入ると彼と太子の「利」は、後に「聖徳太子の事績」とされる十七条憲法等を定め、仏法を梃として倭国全域を掌握しました。

「利」の後継者で「九州年号常色じょうしき元年（六四七）」に即位した天子は、七色十三階官位を制定、全国に評制を敷き、国宰・評督等を任命し、六五二年には全国経営の拠点として難波宮を建設するなど「大化の改新」になぞらえられる大改革を行いました。

このように七世紀中葉には、九州王朝は九州にとどまらず全国を支配領域とするに至っていました。

4、九州王朝の滅亡と大和朝廷の誕生

一方、「常色の天子」の没後、次代の「筑紫君薩野馬さちやま」によって六六三年に対唐・新羅戦、所謂白村江の戦が遂行されました。この敗戦の結果、薩野馬は捕虜となり、九州王朝は勿論、従軍した豪族や民は疲弊したうえ、筑紫大地震などの天災も追い打ちをかけ、これ以降九州王朝の勢力は急速に衰えていきます。これに反し、その間、勢力を温存した天武ら近畿天皇家の台頭は著しく、「壬申の乱」等を通じて徐々に実権を掌握し、七〇一年には「大宝」という彼らの年号を建元し、律令を制定。評制を郡制に改めるなど、事実上全土の統治権を獲得していきました。そして七〇四年、唐の武則天ぶそくてんの承認を得て、名実共に九州王朝にとってかわり、我が国の支配者になりました。いわゆる「大和朝廷」の誕生です。そして七一三年に南九州に残った九州王朝の勢力を討伐、九州王朝は滅亡し、「継体」以来三十二続いてきた九州年号も「大長たいちょう」を最後に消滅しました。

その後、大和朝廷では、九州王朝の存在を消し、自らの正統性を主張するため、その史書を盗用・改変し『古事記』『日本書紀』を編纂、我が国の初元から近畿天皇家が統治していたという歴史を作り上げました。

これが古田武彦氏が長年かけて論証し、また大勢の古田史学の研究者が跡付け、付加してきた九州王朝の建国から滅亡までの歴史の概要です。

古代史の「通説」からすれば、何か「とんでもない話」のように思われるかもしれませんが、以後一つ一つ順を追って解説していきますので、初めの方は、とりあえず「読み流して」いただいて結構かと思います。今回は「『天孫降臨』の真実」を取り上げます。

（＊本稿は古田氏の説を基本に私や諸氏の見解を加え作成したものです。）

「壹」から始める古田史学 II

古田武彦氏が明らかにした「天孫降臨」の真実 古田史学の会事務局長 正木 裕

1、「天孫降臨」とは何か

「天孫降臨てんそんこうりん」とは「天照大神あまてらすおおみかみの命により、葦原中国あしはらのなかつくにを治める為、邇邇藝命ににぎのみことが高天原あまたかはらから筑紫の日向の高千穂峰へ天降った」という神話の事で、戦前は”史実”であるかのように喧伝されていました。尋常小学校の「国定教科書」には、

◆大日本帝国は大神が御孫（みまご）邇邇藝命をして治めたまひし国なり。「此の国は我が子孫の君きみたるべき地なり。汝皇孫いましめみまゆいて治めよ。寶祚ほうそのさかえまさんこと天壤てんじょうときはまりなかるべし」と仰せ給へり。（略）邇邇藝命は三種の神器を奉じて日向に降りまさりき。」等と書かれ、天孫が雲に乗り降臨する挿絵もありました。戦後はさすがにこうした神話は「史実にあらず」と否定されましたが、日向に「ひゅうが」とルビがふられ、降臨の地は「宮崎なる日向」であるとする見解は全く変わっていません。

2、それは青銅の武器を持つ海人族による筑紫侵攻だった

これに対し古田氏は、『盗まれた神話』ほかで、

◆「天孫降臨神話」は大和朝廷の史官による創作ではなく、「歴史上の事実を“本質的に”反映している。それは紀元前二～三世紀頃、朝鮮海峡を拠点とする天照や邇邇芸命ら海人あま族による、稲作が盛んだった豊穰の地（豊葦原水穗国とよあしはらみずほのくに）“博多湾岸”への青銅の武器を携えての侵攻だった」とされました。

『古事記』では降臨の地は「笠紫の日向の高千穂の久士布流多気くしふるたけ」で、「此地は韓国からくにに向い真来通まきとおり、笠沙かささの御前みまえにして、朝日の直刺たださす国、夕日の日照ひでる国なり。故、此地は甚吉いとよき地」とあり、「韓国に向い真来通り」はどう見ても宮崎に当てはまりません。また、鹿児島や宮崎の「高千穂」に紀元前に遡る天孫降臨を示す遺跡ありません。

これに対し“福岡なる筑紫”では、記紀の文言と合致する地勢や、古田氏の言う天孫降臨を示す“考古学的な証拠”が多数存在します。

3、地名・伝承と一致する筑紫への降臨

まず「日向」ですが、慶長年間の福岡恰土郡高祖村櫛くぬぎに関する黒田家文書に「日向山に、新村押立」とあり、『福岡県地理全誌』恰土郡には「民家の後に、あるを、くしふる山と云」とあることから、「笠紫の日向」とは“宮崎なる日向ひゅうが”ではなく、日向ひなた峠・日向ひなた川のある福岡（筑紫）恰土郡高祖連山一帯の地と考えられます。

そこは東に「御笠川・御笠山のある御“笠”郡の地（沙は河口の砂地）」、北西に「壱岐から対馬・韓地へ通じる行路」を望む『古事記』の文面通りの地でした。

そして、『古事記』には邇邇芸命の子日子穗穗手見命ひこほほでみのみことは、「高千穂宮たかちほのみやに、伍佰捌拾歳ごひゃくはちじゅさい坐まします。御陵みささぎは、即ち其の高千穂山の西なり」とありますが、日子穗穗手見命を祭る「高祖神社」が今も高祖山の西山麓、恰土平野にあり、近辺には邇邇芸の妻木花咲耶姫このはなさくやひめを祭る「細石さざれいし神社」もあります。

このように筑紫高祖山一帯は地勢的にも、また伝承からも記紀神話に描かれる天孫降臨の地“高千穂”に相応しいところと言えます。

4、証明された「豊葦原水穗国」への侵攻

『古事記』では邇邇芸は「豊葦原水穗国」に天降ったとされています。

最近の考古学の発展で、博多湾岸から唐津にかけては、早ければ紀元前十世紀、遅くとも紀元前七世紀頃に水稻栽培が開始され、菜畑遺跡では“縄文水田”とも言うべき大規模な水田耕作施設も作られていたことが分かってきました。また、紀元前六～前二世紀頃の糸島地域の支石墓群（志登・曾根石ヶ崎・新町・三雲加賀等）からは、磨製石鏃や壁玉製管玉等の“縄文の遺物”が出土し、同時に縄文人の形質を色濃く残した人骨も埋葬されていました。

一方、紀元前二世紀頃の博多湾岸吉武高木遺跡や野方遺跡からは天孫降臨神話に見える青銅の鏡・銅剣・銅鉾等が出土し、埋葬された人骨は“弥生系”の特徴を備えています。同

時に吉武大石遺跡からは“磨製石剣の切先や磨製石鏃”等も出土しますが、これらは戦闘の結果「体内に残された可能性が高い（福岡市博物館）」とされています。

こうした状況は、「水稻栽培を行い、石剣・石鏃を用い、支石墓群を残した縄文系の色彩の濃い先住民」と、「銅剣・銅矛を用いた弥生系の勢力」の間に紀元前二世紀ごろに戦闘が行われたことを示し、青銅の武具を携えた弥生人の筑紫侵攻、即ち「天孫降臨」を考古学的にも実証するものです。

5、群を抜く海人族の本拠・対馬の青銅武具

また対馬には“天照大神あまてらすおおみかみの原型”といえる「阿麻氏*留あまてる神社」があるほか、縄文後期から弥生時代の多くの遺跡が存在し、銅矛の出土は一二〇本以上に上り、九州に比べても群を抜く数となっています。また朝鮮系の出土物も多く、この地にいち早く青銅の武具が齎されたことは疑えません。一方、倭人伝に「良田無く」とあるように耕作可能地は僅かで、「新型の青銅武器はあるが作物は少ない」対馬・壱岐の海人族が、「食料は豊富だが旧来の武器しかもたない」北部九州の水田地帯に侵攻し支配することは、歴史の必然だと考えられます。

氏*は、氏の下に一。 JIS 第3水準ユニコード 6C10

このように古田氏が述べる「天孫降臨の真実」は文献上も現地伝承からも、また考古学上も確認できるのです。

ちなみに、降臨前の豊葦原水穗国の“宗主国”は「出雲」でした。それは天照が天穗日命あめのほひのみことや天稚彦あめのわかひこらを派遣するも、何れも出雲大己貴おおなむちに「佞媚（ねいび *媚びへつらうこと）」して成就せず、武甕槌たけみかつちらによって大己貴や事代主ことしろぬしを屈服させ「国譲り」させてから「天降った」ことから明らかです。また、出雲神話には「金属器」が登場しないのも、彼らが支石墓人と同時代の「縄文の支配者」だったことを考古学的に裏付けるものです。

先程、『古事記』に日子穗穗手見命は、「高千穂宮に、伍佰捌拾歳坐します」とあることを述べましたが、古田氏は五八〇才とは「二倍年歴」で、二九〇年間代々「襲名」し筑紫を統治してきたことだとされています。次回はこの「二倍年歴」を取り上げます。